
あの冬の話

八神楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの冬の話

【Nコード】

N4319M

【作者名】

八神楓

【あらすじ】

冬のある日、私は小さな命を見送った。看護師という職業上、気持ちは切り替わっているはずだったが、半月が過ぎても私はあの子のことを忘れられずにいた。

（前書き）

「風魔の小次郎」に登場した、飛鳥絵里奈が入院していた病院の看護師を主人公に書きました。
設定やエピソードは、原作、アニメ、ドラマ、作者の妄想が入り混じっています。

そつえば年の暮れなのだ。

病院のそばにある馴染みの定食屋のテレビが今年の出来事をVTRで振り返っている。

レジ横の壁には年末年始の休業を知らせる貼り紙があった。

「はい、お待たせ。看護師さん、年末年始も仕事なの？」

定食屋の女将さんとはすっかり顔なじみになっている。

「はい。明日が休みで、明後日からお正月の三が日まで」

「大きな病院だと大変よね、お正月は病院が休みでも入院している人がいるし、病気は休んでくれないもんね。休めるときはゆっくり休んでおきなさい」

慌しくない時間などない病院勤務の中で、勤務を終えたばかりの時間が一番心が休まる。

でも、正直に言うと今は忙しい時間の方がいいのかも知れないと感じている。

仕事のことを忘れてもいい時間……どうしても気にかかってしまう一人の男子学生。

絵里奈ちゃんのお兄さんは今頃……。

半月前、一人の女の子が短い生涯を閉じた。

女の子の名前は飛鳥絵里奈ちゃん……十歳の誕生日を迎える前日のことだった。

その日は朝から空は曇っていて外は冷え込んでいた。

朝の天気予報で東京地方は所により雪と伝えていたことを思い出す。

幼くして治る見込みのない病を抱えた絵里奈ちゃんはこの病院に二年近く入院をしていた。

絵里奈ちゃんにとって危険なのは発熱だった。

発熱によって体の機能が急激に低下し、入院の間に幾度も危険な状態に陥ったことがある。

興奮するだけでも発熱を起こす絵里奈ちゃんだったので、入院して数カ月後に個室に移った。

個室で入院するとかかる費用は決して安くないのだが、毎月滞ることなく支払われていた。

絵里奈ちゃんはお兄さんと二人きりというが、亡くなった親御さんの遺産と学業の傍らで働いているというお兄さんの稼ぎで入院費がまかなわれていたらしいが、学生でありながら高い入院費用を捻出することができたお兄さんには定かではない噂があったのだ。

お兄さんはこの春に誠士館に転校したというが、その誠士館という学校には以前から黒い噂がある。

もともとは無名だった私立学校がここ最近名を上げてきたのは、公には明かせぬ方法で他校の優秀な生徒を引き抜いていたからだというのをもっぱらの噂だった。

お兄さんもまた入院費をネタに他校から引き抜かれた生徒であり、人には言えぬ裏の仕事をしていると看護師の間で噂になっていた。

けれど、病院を訪れるお兄さんはとても穏やかで、そのような噂を信じることができるような人ではなかった。

ちなみにその誠士館は今年度を最後に閉校になるという。

絵里奈ちゃんのお兄さんが当分病院に来れないから妹をよろしくと私に告げて病院を後にしたのは、この年何度目かの木枯らしが吹いた日だった。

「またお兄ちゃんたら絵里奈が寝ている間に帰っちゃうんだから」

目を覚ました絵里奈ちゃんはふくれっ面だった。

「もうじき絵里奈ちゃんのお誕生日でしょ、その日に来るって言うてたわよ」

私は絵里奈ちゃんにそんな嘘をついた。

一見穏やかに過ごしていた絵里奈ちゃんだったが、その身体はかな

り危険な状態にあった。

以前は発熱が起きると数日から一週間で正常に戻っていた体の機能が、夏ごろに起きた発熱から正常な状態に戻りにくくなっていた。

身体の機能が正常に戻る前に発熱を起こすようになり、その度に絵里奈ちゃんの体の機能は徐々に低下し、体力も落ちてきていたのだ。次に発熱が起きると延命の保障はないと主治医の先生はお兄さんに伝えていた。

当分来られないからよろしくなどと言わず、できるだけ絵里奈ちゃんの傍にいてほしかったのだけだ。

私なんか傍にいるよりもお兄さんが傍にいた方がいいに決まっている。

そして、絵里奈ちゃんの誕生日を翌日に控えた日。

「ねえ、看護師さん」

午後の検温で絵里奈ちゃんの部屋に入ったとき、体温計を受け取った絵里奈ちゃんが言った。

「カーテン開けて。雪の音が聞こえてきたよ」

絵里奈ちゃんに言われてカーテンを開けると、小さな雪が窓を静かにたたいていた。

「まあ、本当に。絵里奈ちゃん、雪が好きだったわね」

「うん、大好き。雪が積もると何もかもが真っ白で、新しく生まれ変わったみたいになるんだもん」

絵里奈ちゃんの生まれ変わるといふ言葉に胸が締め付けられた。

「積もるといいわね、この雪」

私の言葉に絵里奈ちゃんは微笑んでうなずいた。

暖房は効いていたが、カーテンを開けただけで少し冷えたような気がした。

絵里奈ちゃんの身体を冷やして発熱させてはいけない。

受け取った体温計は37度台の微熱を示していた。

「雪が降るとやっぱり寒いわね。さあ、絵里奈ちゃん、お布団に入りましょう」

絵里奈ちゃんは素直に布団に入り、すぐに眠りについた。

ナースセンターにナースコールが響いたのはそれから数時間後のことだった。

その日の勤務時間が終わりに近づき、絵里奈ちゃんの看護を担当している同僚に引継ぎをしているときで、点灯している病室番号を見た私達は思わず顔を見合わせた。

「絵里奈ちゃんの部屋？」

その呼び出しは絵里奈ちゃんの部屋の前を通りかかった、ドア越しのかすかなうめき声を聞き取った新人看護師が鳴らしたものだっただ。

「さ、39度……」

体温計を見た同僚の言葉で緊張は一気に高まり、先生の指示で間もなく絵里奈ちゃんは集中治療室に移された。

「身内の人に連絡を」

先生の言葉は私を絶望させた。

結局、絵里奈ちゃんにとって最も傍にいてほしかった筈のお兄さんは絵里奈ちゃんの死に目に会うことがかなわなかった。

お兄さんの携帯電話にはつながらず、飛鳥兄妹の連絡先となっていた場所は誠士館に通うことが不可能な遠方の寺だった。

連絡を受けて病院を訪れたのは飛鳥兄妹の遠縁に当たる寺の住職の妻で、飛鳥兄妹との連絡が途絶えて何年にもなるという話をした。

それでも絵里奈ちゃんを引き取ってくれ、自分の寺で弔うと告げてくれたのは救いだったと思う。

看護師という職業上、まして救急指定の総合病院となれば人の死に場に立ち会うのは年に一度や二度ではすまない。

小児科に勤務する私は幾度となく小さな命を見送った。

そのたびに切ない思いが湧き上がるが、見送った命を悲しみ引きずる時間は看護師としてのキャリア年数に反比例して短くなっていることを自覚せざるを得ない。

冷たいようだけど、自分達を待っている患者に意識を切り替えていかなければ私自身が勤まらないと思ってここまで来ている。

だけど今回ばかりは、絵里奈ちゃん……というより飛鳥兄妹があまりにも印象が強すぎて百八つの鐘が鳴っても心に残るのではないかなと思ってしまう。

定食屋を出ると十二月に入って二度目の雪が降っていた。

冷え込むはずである。

もうじき新しい年が来るのだから、明日の休みを使って新年を迎える準備をしよう……そんな気持ちで一步踏み出した。

そのときだった。

「！」

私は一瞬、自分の目を疑った。

飛鳥兄妹のことを考えていたせいで見間違えたのかと思った。

道路を挟んだ向こうの歩道にお兄さんがいたのだ。

歩道に立ち止まっているお兄さんを忌々しげに見やりながら通り過ぎた人がいるのだから、幻などではないだろう。

両手に大事そうに抱えている箱はおそらく絵里奈ちゃんだ。

お兄さんは私の微笑みかけ深々と頭を下げた。

「飛鳥さん……」

私はお兄さんのいる向こう側の歩道へ行こうと、横断歩道へ向かって足を進めたとき目の前を大きなトラックが通り過ぎた。

「……」

トラックの通り過ぎたあとの向こう側の歩道にはお兄さんの姿はもうなかった。

「お兄ちゃんが迎えに来てくれたんだ……よかったね、絵里奈ちゃん」

私の心に引つかかっていたものがやっと取れたような気がした。

これまでの間にお兄さんに何があったのか、これからどうするのかを聞いたところでどうなるものではない。

離れ離れになっていた兄妹が再び一緒になれた姿を見ただけでいいではないか。

小さな雪の粒が鼻先に落ちた。

「さて、明日は掃除しなきゃ。部屋だけでもお正月らしくしたいもんね」

私は気持ちを先に進めようと、わざと独り言を声に出して商店街へ足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4319m/>

あの冬の話

2011年1月16日00時41分発行